

外因的なパラメータと、大気中でのいろいろなスケールをもった現象間の相互作用による変動とが複雑に関連し合っており、研究方法も多種・多様なものになってきます。大気大循環の数値シミュレーションの手法で、その複雑なからみ合いの一面を浮かび上がらせることも可能であるし、また、長い過去の記録から現象のからくりを推定することも可能かもしれません。前途には漠然と

した研究方針の映像しか写らない面もありますが、1980年代は、好むと好まざるとに拘らず、われわれがそれに挑戦する新しい未知の時代だろうと思います。このような研究面での動きを、学会活動のひとつとして会員の皆様にわかりやすく紹介していくことも、理事会として大切な課題だと考えています。



大気環境の科学 3

都市の大気環境

河村 武 編

東京大学出版会, 1979, A 5 判,
185頁, 2500円

この本は、8人の著者が分担して、都市気象にかかわる諸問題について解説したものである。「はしがき」によると、「従来、都市の大気環境を総合的にとりまとめた書物が乏しかったために、これらの分野では研究面ばかりでなく、計画設計や対策などの実務面でも不十分な点が多かった。本書の内容は、気象学や気候学、大気汚染の研究家や専門家ばかりでなく、地方自治体や企業などで公害防止の実務にたずさわる多くの方々に関与するのである」。これからわかるように、この本の主なねらいは、都市気象についての知識をひと通り取りそろえることにある。

目次(章と節の題目)は、次のようになっている。

第1章：都市気候——都市気候の実態，都市気候の変化

第2章：都市の大気汚染——大気汚染の実態，大気汚染と局地循環，都市の放射環境

第3章：都市大気モデリング——大気汚染の予測のモデリング，海陸風のモデリング，ヒートアイランドのモデリング，放射と熱収支のモデリング

これを見ると、都市とか大気汚染とかいう言葉が目について、いかにも応用面ばかりが重視されているかのように感じられるが、実際には、気象学になじみの深い基礎的な問題が多く取り上げられている。たとえば、第3章

では、都市気象を作り出す物理的なメカニズムに重点が置かれているし、第2章では、都市の影響を受けない自然の海陸風についてひと通り解説されている(2.2節)。大気汚染については、ややこしい反応論に立ち入ることなく汚染の実態がすっきりと述べられている(2.1節)。また、放射と熱収支の話(2.3節)は、最近の研究結果を多く取り入れて、新鮮さを感じさせる。

この本は、全体を通して実用性に重点が置かれていて、少ないページの中に、今までの研究で得られた多くの事柄が盛り込まれている。格別の予備知識がなくても読めるし、面倒な式は出て来ない。各節は互いにほぼ独立しているので、別々に読むことができる。ただ、節によっては参考文献の数が少なく、さらに詳しいことを知りたい読者にとっては物足りないかも知れない。また、一般向けの本と違って、読者の興味をそそるための工夫はされていないので、関心の薄い人が読んでサッパリおもしろくないのではないかと思う。

現在、都市の気象や環境の問題と取り組んでいる人たちの間に、必ずしも十分な情報の交換が行なわれているとは言えない。そのため、せっかくの観測資料が、存在を知られなかったり入手が困難だったりして、有効に使われないまま寝かされているというような、不合理なことが少なくないようである。この状態を改善するのは簡単ではないだろうが、人々の間に都市気象への関心が高まり、理解が深まること、重要なことの一つであろう。このような面にも、この本が役立つことを期待する。

(藤部文昭)